



AIYES 通信

横浜スペイン協会会報

発行：横浜スペイン協会 横浜市鶴見区岸谷 2-18-4 年4回発行（1月4月7月11月）

ホルヘ・トレド駐日スペイン大使横浜スペイン協会名誉会長就任

昨年8月にゴンサロ・デ・ベニート大使閣下の後任として、駐日スペイン大使に着任されたホルヘ・トレド大使閣下を横浜にお迎えし、同行されたデオリ文化参事官とともに、6月7日に恒例の横浜外人墓地への墓参と歓迎会を開催いたしました。今回のトレド大使の最初の訪問地は、横浜の代表的な観光地でもある大栈橋です。この場所は2002年に建設され大型客船ターミナルであり屋上公園ともなっています。この建物の設計については、日本で初めての国際コンペが行われ、決定した設計案はスペインの建築家アレハンドロとイランのファルシドの共同設計案となりました。当日も大学の建築科の学生が見学に訪れていました。当時のトレド大使は、若き日のアレハンドロと親交があり、今回初めてこの場所を訪れ大栈橋から横浜の街の景観を楽しまれました。その後、横浜市庁舎を表敬訪問され、林市長と予定時間を延長してスペインと横浜市の国際交流についてのお話をされました。市長面談の際、横浜市国際局の局長、国際政策部の担当部長、国際連携課担当係長も同席されました。これを機に、今後、当協会は横浜市国際局と連携を取りながら、更にスペインとの国際交流の推進をはかりたいと考えております。



当日は雨が降る天気でしたが、12時に横浜山手外人墓地正門前には、24名の会員がトレド大使をお迎えし、今年65回忌を迎える故フランシスコ・デル・カスティージョ大使の墓参を行い、大使閣下よりスペインの国旗をあしらった花輪の献花を行い、ご冥福をお祈りいたしました。墓参が終わり歓迎会の会場である、ポートヒル横浜の会場へと移り、歓迎レセプションが始まりました。初めに、下山会長のトレド大使歓迎についてのスペイン語の挨拶に始まり、続いて、お琴の児玉寛子様、谷藤あき子様、鼓（つづみ）奏者の今井尋也様3人によるスペイン国歌の演奏が行われました。演奏後は、トレド大使や会場にいる多くの皆さんから多くの拍手が起こりトレド大使も大変喜ばれていました。次に、トレド大使の挨拶では、「横浜スペイン協会の皆さんがスペイン文化(音楽、舞踏、絵画、サンティアゴ巡礼、食など)の普及に努め、スペインとの友好関係をボランティア精神で深めようとしていることに尊敬の念を持つとともに感謝している。来年の協会30周年ではいろいろな行事を企画されていて、また大使館に桜を植樹していただけることも伺っており楽しみにしている。本協会の名誉会長への就任がスペインとの友好関係にお役立てれば嬉しい、皆さんのスペイン語の習得などのお手



の挨拶では、「横浜スペイン協会の皆さんがスペイン文化(音楽、舞踏、絵画、サンティアゴ巡礼、食など)の普及に努め、スペインとの友好関係をボランティア精神で深めようとしていることに尊敬の念を持つとともに感謝している。来年の協会30周年ではいろいろな行事を企画されていて、また大使館に桜を植樹していただけることも伺っており楽しみにしている。本協会の名誉会長への就任がスペインとの友好関係にお役立てれば嬉しい、皆さんのスペイン語の習得などのお手

伝いもさせていただきたいと考えている」との挨拶があり、乾杯の音頭を取っていただきました。歓談の時間はお琴と鼓の演奏が続く中、トレド大使閣下も、各テーブルを回られ、全ての会員の皆さまとの懇親を深められました。そして、今回の重要なセレモニーである、横浜スペイン協会名誉会長受託文書に、トレド大使の署名を頂きました。限られた時間の中でしたが、会員の皆さまとトレド大使との交流を持つことができました。今後も機会があれば、トレド大使やスペイン大使館との交流の機会を多く持って行ければと考えています。(武菱 邦夫)



<< 2019 年度定時総会のご報告 >>

日 時 : 2019 年 6 月 1 日 (土) 14:30 ~ 16:30
 場 所 : かながわ県民センター604 号室
 出席人数 : 21 名
 議長 : 下山利明会長
 議案 : 総会に先立ち、2019 年 4 月 25 日開催された理事会において、
 「2019 年度定時総会議案書」が承認された。

[議案]

1. 第 1 号議案 2018 年度事業報告について
2. 第 2 号議案 (1) 2018 年度会計決算報告について
 (2) 監査報告

3. 第3号議案 2019年度事業計画（案）について
4. 第4号議案 2019年度会計収支予算（案）について

[議事]

1. 臼井総務担当理事の司会で開催し、まず下山会長より挨拶があった。
2. 協会規約10条(2)に則り会長が議長の座に着き、臼井理事より、第1号議案の報告があった。
引き続き、第2号議案(1)について、臼井理事より説明があった。その後、幸島監事及び原監事から、2018年度会計処理は適正に執行された旨の報告が行われた。2号議案につき衆議を諮ったところ、出席者全員の賛同を得て可決された。
3. 第3号議案について下山会長より説明があり、各担当理事が補足説明を行った。第4号議案は下山会長より説明があった。3号議案、4号議案につき衆議を諮ったところ、出席者全員の賛同を得て可決された。その他特に提案はなく、定時総会は16時00分議長が閉会を告げて終了した。

引き続き、ロンダの桜プロジェクト事前調査の報告が岩田理事からなされた。(16:00~16:30)

第3号議案 2019年度 事業計画について

基本方針

スペイン国に深い関心を持つ者が集い、会員相互の親睦をはかりつつ スペイン文化の普及と友好親善関係の向上に貢献する。

1. さくら植樹を通じてのスペインにおける文化交流の推進
2. スペイン語教室の拡充
3. スペインサロン・サークル活動の更なる活性化
4. 国内外の人的交流の積極的推進
5. 広報活動の充実
6. 設立30周年に向けた記念行事の企画・準備

スペイン語教室 方針 (福長理事 松村理事 岩田理事)

1. 基礎から実用面を網羅したカリキュラムで講座を一層充実させる
2. 夏期スペイン語文化講座の開催。特別講座と文法講座を開講する
3. ホームページを活用し外部からの受講者の増加を図る

スペインサロン 方針 (服部理事 平本理事)

1. 講演会の開催 (スペイン文化サロン)
2. 料理教室の開催

渉外・イベント担当 方針 (武菱理事)

1. 国際交流の充実 (大使館及びロンダ市等との積極的交流・国内外桜植樹準備)
2. 日本各地のスペイン協会との積極的な交流 (2団体/年)
3. 横浜市、神奈川大学及びメディアとの積極的な人的交流
4. 新年会の開催及び大使館イベントの開催

総務・会計 担当 方針 (臼井理事 古賀理事)

1. 会長及び各担当理事、委員の役割を明確化
2. 適切な予算の執行と管理

広報 方針 (下山会長)

1. AIYES 通信 4回/年 発行

- 2.ホームページのコンテンツ充実 タイムリーな情報の更新
- 3.ホームページ上に新たなブロック開発（桜植樹、スペイン語）対応

30周年記念イベントの計画立案と準備

- 1.ロンダ植樹（岩田理事）
- 2.大使館植樹（武菱理事）
- 3.記念パーティー音楽会（武菱理事）
- 4.スペイン展（武菱理事）
- 5.記念特別講座（服部理事）
- 6.小冊子（臼井理事）
- 7.語学教室イベント（福長理事）



総会ご出席の方には、議案書の印刷お渡ししました。

又、横浜スペイン協会ホームページ（<http://www.yokohama-spain.jp/>）会員専用ページに議案書を登録してありますので、必要な場合こちらからご参照ください。

横浜スペイン協会 設立 30 周年記念事業

*さくら植樹 ロンダ市友好親善ミッションについて

4月4日、ロンダプロジェクトのメンバー有志[下山、岩田、大戸、鈴木(マドリード在住)]の4名でロンダ市を訪問し、ロンダ市役所、過去の植樹の関係者との事前打合せを行いました。本ミッションの趣旨をロンダ市関係者の皆様にご理解頂き、具体的な訪問日時の決定、活動内容の大枠の合意がなされました。今回の事前打合せでは、過去のさくら植樹を現地でリードして下さったカベッサさん、故春田美樹画伯夫人のレメディオさんにも出席頂き、暫く中断していたロンダとの交流再開を大変喜ばれておられました。また、現地の新聞への掲載、TVのインタビューもあり、大いに盛り上がりました。

詳細につきましては、6月1日の総会と6月10日の旅の会にて報告致しました。募集案内については、協会ホームページの会員専用ページに掲載しておりますのでご覧ください。出来るだけ多くの会員の皆様のご参加を期待しております。(会長 下山利明)

ロンダ市友好親善ミッション 概要

【日時】：2020年4月2日（木）、3日（金）の2日間 （ロンダ 4/1 現地集合・4/4 現地解散）

【訪問先】：スペインマラガ県ロンダ市

【スケジュール】（案）： ※詳細については、今後、現地と詰めていきます。

2020年4月1日（水） 夕方、ロンダ市指定ホテル集合

2日（木） ロンダ市長表敬訪問

さくら植樹 過去の植樹場所訪問と新たな植樹（2-3ヶ所）

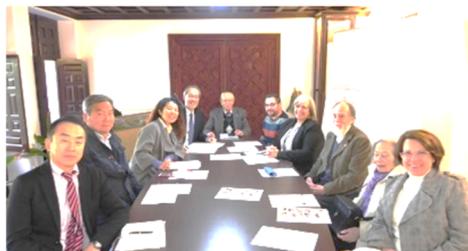
近郊観光 懇親夕食会

3日（金） 市民文化交流（日本・スペイン文化紹介）

4日（土） AM 解散



プロジェクトメンバー桜の前で



ロンダ市役所での打ち合わせ



TVインタビュー



Ronda retoma relaciones con la Sociedad Hispánica de Yokohama

Este colectivo japonés inició los contactos en Ronda gracias al pintor Miki Haruta con la plantación en 1993 de más de 200 cerezos como acto de hermanamiento.

La delegación de Turismo del Ayuntamiento de Ronda ha recibido hoy la visita de la Sociedad Hispánica de Yokohama, colectivo que inició relaciones con la ciudad en el año 1993 cuando vinieron a Ronda a plantar en varias zonas de la ciudad cerezos en homenaje a Miki Haruta. Ahora se pretende retomar esta relación, como ha explicado la concejal, Isabel M^a Barriga, quien ha recordado la figura del pintor japonés que tenía el sueño de establecer lazos culturales entre su país natal y nuestra ciudad. Actualmente, de los 200 ejemplares de cerezos que se plantaron en su día, han sobrevivido unos cuarenta.

La concejal ha explicado que el próximo año se celebra el trigésimo aniversario de esta sociedad por lo que su actual presidente, Toshiaki Shimoyama, hijo de la persona que estableció los lazos hace dos décadas con Miki Haruta y con Ronda, vuelven a la ciudad para renovar estos puntos de encuentro con la ciudad estableciendo ya un evento en el mes de abril del próximo año, además de diferentes actividades culturales que refuercen el hermanamiento, para lo que se ha propuesto crear vínculos con colectivos rondeños.

Barriga ha explicado que esta visita viene a reforzar en el ámbito turístico las relaciones con Japón que ya se habían iniciado con acciones como la visita a la Feria de Jata o la llegada a Ronda hace unos días de una de las agencias de viajes más importantes de aquel país.

※ ロンダ地方新聞・WEB版 (2019. 4. 4)



●スペイン語クラス

<夏期スペイン語文化講座開講のご案内>

今期の講座は、スペイン人講師2名とアルゼンチン人講師1名により以下の通り計5回開かれます。テーマには、スペイン語クラスからのご要望で、お祭りと料理を加えました。

テーマ：「アルゼンチン人の習慣と気質、人気料理と飲み物」「アンダルシア州、カタルニャ州のお祭りとその歴史」「スペイン語の方言」「カタルニャ独立運動④」

場所： かながわ県民センター 305 教室（初日のみ）、711 教室

開講日時：7月29日（月）31日（水）8月2日（金）5日（月）7日（水） 10:30～12:30

受講料： 会員7,000円、非会員8,000円（詳細は、協会ホームページをご覧ください）

<特別講座「ドン・キホーテ」を楽しく読み解く：後編を終えて>

スペイン文学の金字塔「ドン・キホーテ」は聖書の次に読まれているといわれます。スペイン語を学んでいる者としては是非読みたいと中級者向けの読本を購入するのですが、結局積ん読状態が何年も続いていたところ、今回ようやく救いの手が差し伸べられました。

膨大なページ数に及ぶこの書物は、吉田先生の緻密に計算された講義と画像が理解を深めるのに十分でした。最終回の第74章「ドン・キホーテの遺言と死」はA4サイズの4ページの原文を読み解くもの。ドン・キホーテは熱病にかかり6日間床につき医師から死が遠くないことを告げられます。深い眠りのあと狂気から醒めて遺言を作成し、3日間の危篤状態ののち世を去りました。



<吉田彩子先生を囲んで>

シデ・ハメテ・ベネンヘリが柵の針金に吊るされているペンに語りかけます。このペンを持ち去る者は再び騎士の数々の武勲を書こうとするであろう。故に何人にも手を触れさせないよう言い聞かせよ、とペンに向かって説くのです。そしてVale（さらば）で物語を結びます。会場全体が従容として死を受け入れると共に最後まで読み切ったという感動に包まれた時でした。（吉田美紀子）

<吉田彩子清泉女子大学名誉教授の「新特別講座」 10月開講のお知らせ>

吉田先生のご指導による2017年度後期に開講した「ドン・キホーテ」を読むクラスは基礎編から講読までの1年半、時代背景や数々のエピソードをお話頂きドン・キホーテとサンチョパンサの世界を楽しく学びましたが2018年の後期に終了致しました。

第2弾として同じミゲル・セルバンテスの中・短編小説からなる「模範小説集」を後期から計6回吉田先生にご指導頂くことになりました。

そして9月20日（金）には「スペイン文学の名誉と森鷗外のカルデロンの翻訳」のテーマでお話し頂くことになっています。その折に私たちには馴染みの薄い「模範小説集」についても少しお話しして頂きます。是非ご期待下さい！！（福長昭代）

<新設クラスのご紹介>

2019年度前期は4月1日から11クラスと文法クラス(毎月1回)の講座がスタート致しました。今回は新設の入門クラス「リリオクラス」の紹介を致します。

「リリオクラス」 毎月第1,2,3 木曜日 13:00~14:30

担当：中園竜之介講師

今年の4月より、初めてスペイン語を学ばれる方や再度一から学び直したい方を対象とした「リリオクラス」を担当させていただくことになりました。入門クラスと言っても、受講生の皆さんはスペインへのご旅行時のために学習されている方や、将来スペイン語でのガイドを目指されている方など、それぞれの目標を胸に真剣に取り組まれています。一方で、すでに動詞の活用に入り、急に難しくなったと感じている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。かくいう私こそ、実は動詞の活用が覚えられず、その後も数多い時制やネイティブの発音が聞き取れないことに悩み、何度もスペイン語の学習をやめようと思うほどの挫折を味わってきました。どんなに勉強しても結果が見えず、私は語学が向いていないのだと思い、悔しくて泣いたことも何度もありました。それでもスペイン語の学習をやめないでこられたのは、恩師が「続けることの重要性」を教えてくれたからでした。私が身を持って体験した「継続は力なり」という言葉を、僭越ながら今スペイン語に壁を感じている方にお届けしたいと思います。(講師・中園竜之介)



イケメン先生の噂がどこからか漏れたのか、新設のリリオクラスはウェイティングが出るほどの応募があったようですが、幸運にもクラスメンバーになれた15名の白百合たち(男性5名・女性10名)で新しいクラスをスタートさせました。中園先生にはABCから優しく丁寧に教えていただき、皆真剣に授業に取り組んでいます。先生の印象「動物に例えると何?」というアンケートでは、ウサギ・イヌ・リス・アライグマ・カモシカ・フクロウ・おサルさん、ヤギさんと可愛い系、なぜか水の生き物のイルカ・ラッコ・カワウソも。変わり種ではペガサス。先生の口癖「バッチリです!」「皆さん素晴らしい!」と励まして頂きながら、これからもスペイン語のお勉強頑張っていきます!(下山綾子)



●スペイン・サロン

「ギターを通してみるスペインとアルゼンチン」…二人のドン・アンドレス…

2019.4.13 かながわ県民センター 清泉女子大学教授 長野 太郎

一人はスペインのドン・セゴビア(1893-1987)、もう一人はアルゼンチンのドン・チャサレータ(1876-1960)。古い音源を聴きながらはるか昔の二人の生き方をたどりましました。セゴビアはフラメンコなどの民衆的音楽からクラシックへ、チャサレータはクラシックからフォルクローレなどへと経験を積み、これらの音楽資源の社会的認知に努めたのですが、なんととっても彼らがギターという楽器の改良に協力し、演奏法を改革し、それを世界に通じる楽器に押し上げたことが大きな功績と言えるでしょう。バッハのリュートなどのための曲をギター用に編集したこと、コンサートホールでの演奏会を実現したことも、今クラシックの分野でもポピュラーの分野でもギタ

ーが定着して活躍できる道を開いたのです。スペイン市民戦争の時、共和派によって家を荒らされたセゴビアがウルグアイのモンテビデオに移り住んだときには、チェサレータの娘さんにギターを教えるなどしてギタリスト同士の交流がありました。アルゼンチンからラプラタ川を船で渡って行くチェサレータ親娘の写真もすてきでした。

バッハ、タレガ、ファリャ、アルベニス、グラナドスの名曲をたくさん聴かせていただき、最後にセゴビアの二度目の来日時（1959年）のグラナドス・「アンダルーサ」の演奏映像をじっくりと見せていただきました。（松本益代）



*次回は2回にわたり下記の通りスペイン・サロンを開催いたします。
皆さまのご参加お待ちしております。

「ゴヤからピカソへ：スペイン近現代の平和と戦争」

10月12日(土)：「ゴヤ ロココ美と戦慄の近代：雅宴から戦争へ」

11月9日(土)：「ピカソ クラシック－シュルー内戦－ゲルニカ」

時間：13：00～15：00(11/9 講演会終了後～15:30 まで茶話会)

講師：早稲田大学名誉教授 大高保二郎

会場：かながわ県民センター1501号(10/12)、304号(11/9)

参加費：2000円(2回の連続講座) 学生1000円

お申込み：spain_salon@yokohama-spain.jp(服部・平本)

●スペインサークル

《旅でスペインを識ろう会》

*Don Quijoteの舞台の町を訪ねて（胡桃澤恒二さん、みどりさん）

2019. 3. 11 於かながわ県民センター

胡桃澤恒二・みどりご夫妻による、ラ・マンチャ地方、ドン・キホーテの舞台を巡る旅は、まさに「旅の会」に相応しいものでした。そこにはご夫妻の22年に亘るドン・キホーテの地への関心と生涯が重なって見えました。協会のドン・キホーテサロンとしては2006年1月の堂ヶ島温泉ホテルに於ける新年会・サロンとして荻内勝之教授の講演と田邊一凜嬢の講談が思い出されます。スペイン文学の最高峰「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」を1605年にその前編を著した作者のイダルゴ ミゲル・デ・セルバンテスの生地であり、セルバンテス文学賞の授賞式が行われるAlcala de Henares から、旅は始まり、著者が没したMadridの住居までのルートをと、Toledo, 風車の町Consuegura, “はたご屋”のPuerto Lapice, 8月の古典演劇祭で知られるAlmagro, 広場にDon QuijoteとSancho Panzaの像のある町



Alcazar de San Juan, 巨人と間違えて突撃した風車の Campo de Criptana、思い姫ドルシネアの住む El Toboso を巡る旅を 1997 年、2012 年、2014 年、2016 年の写真と比べながらの興味深いセミナーでした。(山崎宗城)

* 「聖地 エルサレム探訪」(小関敏雄さん)

2019. 4. 8 於かながわ県民センター

「エルサレムを語るには歴史を知らないと面白さはわからない」と小関氏はエルサレムの歴史を「ユダヤの時代」「イエス・キリストの最後の一週間」「コンスタンチヌスの時代」「イスラムの時代」「十字軍の時代」と五つの時代に大きく分け、画像を多数添えて進められた。配布された三枚のハンドアウトは講演内容を端的に記す。と同時に自身が現地で撮影した写真に加えて、地中海の東岸の国々と死海的位置を示す地図とさらに絞り込んだ死海の西側に広がるイスラエルを含めた周辺国をとらえた地図を載せ、まさに史的視点と地理的視点を基軸として展開された。微視的に「嘆きの壁」を含む旧市街地の地図に加えて、イエス・キリストが死刑判決の場から架刑に処された場所までの道順を細部にわたり記した地図と写真を示された体験談は実に興味深く、聴く者をエルサレムに誘う。特に「イエス 最後の一週間」は臨場感を覚えた。資料は永久保存もの。(今村楯夫)



* 「カナリア諸島旅行記」(大竹智栄子さん)

2019. 5. 20 於かながわ県民センター

語学番組[旅するスペイン語]で昨年、今年とカナリヤ諸島バージョンを見て、その素晴らしさに魅了されていたところ、タイミング良く5月の旅の会のテーマが[カナリア諸島]という情報が入り、楽しみに待っておりました。発表するのはスペインに造詣の深い大竹智栄子さん。参加者は20名程でコージーな雰囲気。彼女自身風邪気味なのにテンポ良く、そして熱っぽく(決して風邪のせいではありません)その魅力を伝えてくれました。名所・旧跡や歴史、名物料理や飲み物、カナリア諸島ゆかりの話などなど。映し出される写真も、素晴らしい景色は勿論のこと、ユーモラスな看板やマンホールなど楽しめるものが多く、思わずクスッと笑ってしまう場面も！特に印象に残ったのはテネリフェ島のテイデ山や竜血樹とラ・パルマ島の天文台眼下に広がる滝の様な雲群。圧巻でした！途中休憩も忘れる程の内容で、予定時間があっという間に無くなってしまいました。盛りだくさんの10日間の旅を限られた時間内で発表するのは、さぞや纏めるのが大変だったでしょうね。近いうちに、私もカナリア諸島を旅してみたくなりましたよ！！彼女に感謝です。大竹さん、お疲れ様でした。(江口 吉光)



●シネマサロン

「サッドヒルを掘り返せ」(Sad Hill Unearthed)

監督：Guillermo de Oliveira, 2017, スペイン

2015年10月、スペイン・ブルゴスの荒野を散策中の青年たちがすり鉢状の土地を見つけた。それは1966年、当地で撮影された「続・夕日のガンマン/地獄の決闘」の決闘シーンの背景として作られた墓地が約50年間放っておかれ、土に埋もれ雑草がはびこっていたの

だった。彼らは元の姿に戻そうと素手とスコップで土をはがそうとしたが、作業はなかなかはかどらない。そこで人手と資金不足をSNSで訴えると、週末には助っ人がたくさん集まり、重機も使えるようになった。中心からは石敷きの広場が現れ、その周りに円形劇場のように約7,000の小さな墓を確認。協力者の名を木の枝や木端で新しく作った墓標にペンキで書く。2016年10月5日、彼らが宝物のように思うその映画を50年ぶりにこの広場で仲間たちと見る。主演者・クリント・イーストウッド、音楽担当のエンニオ・モリコーネ(決闘シーンに先立ち流れる「黄金のエクスタシー」は彼の自慢作)などからお祝いのメッセージが届く。そして本編の上映。映像と音楽に酔いしれる中、夜が更けていく。

当時のフランコ政権は政治的イデオロギーのない映画として撮影を許し、500人の軍人をも提供。彼らは南北戦争当時の村や橋のセットを作り、エキストラとしても出演。政府には多額のドルが支払われたという。(松本益代)



●スペイン文学余話 (6)

「カラタユーへ行ったならば Si vas a Calatayud」(II)

ホセ・マリア・イリバレン José María Iribarren は『諺の由来』のなかで次のように述べる。歌の作者はパスクアロンと言う名のビウエラを弾くやはり盲目の旅芸人である。杖をつき、少年に手をひかれて各地をめぐり歩いていたある夏、カラタユーで露出の激しい服を着た美しいドロレスと出会った。彼女は彼の身の上に同情して施しをくれた。それに感謝して即興で捧げた歌である。フェリウは「親切をほどこすのが好きである amiga de hacer favores」を「(女が) よろこんで男に身を任せる」の意味と誤解、あるいは意図的に曲解し、慈悲深い女性を讃える歌を、尻軽女の物語に変質させてしまったのである、と。だが、このイリバレンの説は、近年のアントニオ・サンチェス・ポルテロ Antonio Sanchez Portero による調査とは矛盾する。歌のモデルとされるマリア・デ・ロス・ドロレス・ペイナドール・ナルビオン María de los Dolores Peinador Narvión (1819-1894) という名家の令嬢は、資産家の母親が亡くなると遺産の相続人となったが、父親は遺産を娘に渡さずに再婚してしまった。ドロレスはグラナダ出身の軍人とコルドバで秘密裡に結婚して帰郷した。夫の狙いは妻の相続財産だった。実父との長い年月にわたる訴訟に勝って手にした遺産も、裁判費用と夫の浪費癖ですぐに底をつき、貧窮した4人の子持ちのドロレスは誹謗中傷にさらされた。あげくは身持ちの悪さを揶揄するホタまで流行し、1850年頃ドロレスの一家は逃げるようにマドリッドに移った。当地でも2人の子供を授かるが、未亡人となった晩年は子供たちからも見捨てられ、貴族の館に身を寄せて寂しく世を去り、アルムデナ聖堂の共同墓地に葬られた。

ドローレスにまつわるコプラのなかで広く知られるのはサルバドール・バルベルデ Salvador Valverde 作詩、ラモン・サルソソ Ramón Zarzoso 作曲のパソドブレで、母の悪評のために後ろ指をさされる娘の視点から歌われている。「カラタユーへ行ったならば、ドローレスがどうしているか尋ねて欲しい。／一曲のコプラに辱められ、悩み苦しんで彼女は死んでいった。／伝えておくれ、ドローレスの娘のあたしが／あんたにそう告げたと。Si vas a Calatayud, / pregunta por la Dolores; / una copla la mató de vergüenza y sinsabores. / Di que te lo digo yo, / la hija de la Dolores!」(吉田彩子)

●会員の活動報告

*スペイン巡礼は愉し

2019.5.17～5.21

毎年巡礼されている問屋さんにご一緒して、巡礼初体験してきました。体力に自信のない我々3人(会員の今村さん、原さん)は、フランスのオロロンからスタートし1000kmを歩く問屋さん、モリナセカから参加した会員の服部さん達の健脚組と、ガリシア州のサリアで落ち合い、114kmの行程を歩きました。冬の間、軽登山や20kmハイキングで鍛えた(?)とはいえ、5日間毎日歩くことには不安がありました。また巡礼中は寝袋を利用してアルベルゲ(巡礼宿)に泊まるので、これも不安でした。唯一助かったのは、荷物を宅急便で送ることができたことです。なんと€3。内緒の話ですが、スーツケースで行きました。5月17日、6:30に出発。あいにくの雨、肌寒で天気予報によると3~4日は雨が続くとのことで、覚悟を決めての旅立ちとなりました。が、降られたのは初日だけで、尻上がりに天気が良くなり、畑や牧場、森、せせらぎ、かわいい村など沿道の景色に癒され、巡礼者や沿道の人たちと「¡Buen Camino!」との声の掛け合い、時には歩きながらの会話で疲れも吹き飛びます。宿泊地に着くと、レストランで遅めの昼食、もちろんワインも。時には地元の人たちと飲めや歌えで盛り上がり、夜はミサに参加したり、自炊したり、洗濯したりで、あっという間に時は過ぎていきました。そして5日目の昼、歓喜の丘に到着。遠くにはサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂が見えました。あまりにも順調に着いたので、私にとっては歓喜というより、これで巡礼が終わってしまうのかという感傷・惜別の丘でした。ラストの5kmは一步一步を踏みしめながら、ゴールイン。巡礼証明書を手に入れたあと、バルのはしごで、CAMINOを締めくくりました。最後に、冬のトレーニングから巡礼本番までお世話になった問屋さんや巡礼を共にしたメンバーの皆さんに、紙面を借りてお礼申し上げたいと思います。(臼井慎一)



(写真) 上から、パラス・デ・レイのレストランで村の人たちと巡礼者入り交じりのfiesta／歓喜の丘で¡万歳!／道中一緒だったスペイン人とサンティアゴ・デ・コンポステーラで再会

